

## 目次

- ( 1 ) 動機
- ( 2 ) 夢
- ( 3 ) 過去
- ( 4 ) 自由
- ( 5 ) 発見
- ( 6 ) あとがき

私が魅力を感じるひと、そして、私に素敵な影響を与えてくれた人、それは S ちゃん。同じ早稲田大学に通う文学部 2 年生の女の子。私たちは 1 年前バイト仲間として出会った。私たちは自分のバイト先のカフェを図書館がわりにして長居して勉強したり、おしゃべりしながらお茶するのが大好きで、特にこの夏休みは私はお金もなく旅行にもいけずもっぱらバイト先で本をよんでいた気がする。

## ( 1 ) 動機

さて、私はこの夏休み将来自分が何になるかという問題でいきづまり、毎日毎日思いあぐねて苦しんでいた。英語の教職をとっているのだが、周りに教師をしている知り合いや特別な紹介がないと相当難しい、東大に入るよりも難しいときいて、ショックを受けて、それだけを目指すのは危険だ、と思い、では、経済安定を考えて、また回りにもめざしている人がいるし、と公務員試験をうけようかとおもったりした。「公務員をめざそうかと思う」と父や母に言ったところ、予想どおり「公務員は社会的にもすばらしい仕事だ、がんばれ」と、誉められた。本屋にいったら一応、受験対策の本を買ったりして読んだものの、高校で数学をしたこともない私には、ぜんぜん面白なくて、眠いだけであった。予備校も何校か見てまわったけれど、何もピンとくるものがなかった。就職活動は「民間の事務で毎日お茶くみやコピーをして 4 時あがりだよ」って言っていたのを聞いて、ますます、いきたくなかった。周りのひとことひとことは、私をどうしようもなく不安にさせた。それらの事を考えるだけで先が真っ暗になるような、どよんと沈みがちな毎日を送っていた。

そんなある日、隣の席にコーヒーを持って現れた S さんにふと聞いてみた。

「将来なにになるかきめた？」

すると S さんは笑って言った。

「うーん、あたしは、いろいろなりたいものがあるって、昔から家がすきだから建築会社もいいし、書道の先生もいいなって思うし、古文の研究もしてみたいんだよね。」

そのとたん、なんだか胸がすうっと楽になった。なんでこんなに思いつめてたんだらうとばかばかしくなった。私は安定した職業や、親も納得いくような職業にとらわれていて

本当になにがしたいのかという、一番大事なことを見失っていたのである。「いろいろなりたいたいものがある」という言葉、なんて自由なんだろう。私は、「あの職業はここがだめだし、あの職業はここが合わないし」と切り捨てていって、いわゆる消去法で選んでいたのに。「あれがしたい、これもしたい、でもどれにしようか」と前向きに考えているひとみの明るい笑顔に胸を打たれた。そして私は高校時代を思い出した。実は私は高校まで音楽高校でピアノを専攻していた。一日十時間ぐらいの練習をする毎日で、生活の中心にいつもピアノがあった。小さなころから、母が厳しかったというのもあったが、その影響を受けて、素敵なピアノの演奏家になることを夢見て指にテープを貼って練習していた。毎日つらかったが、楽しかった。ピアノが生活の中心にあった。少なくとも、受験前までは。だが、大学に落ちた。私はそこで挫折して、夢をあきらめた。なにしろ私立の音大は授業料がとても高く、2年目は国立だけをまた1本受ける勇気がなかったから。

早稲田にはいってからというもの実はぼっかりと胸に穴があいたようなむなしさの毎日であった。そのときから私は夢を追うことに慎重になった、いや、恐れるようになったんだと思う。

だけど、Sさんのくったくのない笑顔は私を癒して、心の中の堅いなにかをときほぐしてくれた。一瞬で、ぱあっと目の前が明るくなったような気持ちにさせた。じつは今こうして日本語教師という夢と向かい合えるようになったのは彼女のおかげなのである。以前からこの職業はテレビや雑誌で見て興味をもっていたのだが、大学の専攻もちがうし、周りに同じ職業を目指す友達にめぐり合えず、あきらめていた。

その晩から私は毎日インターネットや本で日本語教師について調べてみた。父にも相談して、免許はしばらく我慢するからお願いと頼んで、馬場にある専門学校に一年間通うことも許してくれた。そして私はまるで子供のようになんかさまざまなことに興味が湧いてくるのを感じた。学校にいかせてくれるといってくれた父にも感謝だけど、この大きな変化をもたらしてくれた、仁美の明るい笑顔、自由さは一体何なんだろう。どこからきているんだろう。彼女のこと、もっと知りたいとおもった。

## (2) 夢

10月23日、私は彼女の家を訪れた。かわいい雑貨がいっぱいかざっている。壁に無造作に貼った自分で描いた絵はがきや、積み重なった雑誌。なにか散らばっているのに、居心地のいいとても女の子らしい部屋。まるで映画のアメリカの中の部屋みたい。私はベッドに座って、しばらく、いつものように、とりとめのないような話をしてから、本題にはいった。

「私ね、この夏休みに将来の夢でどういう職業を選ぼうかと悩み、暗い気持ちになってたんだ、でもひとみに将来の夢を聞いたとき急に、楽な気持ちになって、前向きになれたんだよ。どうしてかっていうと、なんかひとみの夢にはわたしのように束縛がないと感じたん

よ、わたしの束縛ってというのは、たとえば、経済的安定とか、社会的にこの職業を選べば親にも賛成してもらえそうとか、まずそこから始まって、自分にとって不得意な分野がすこしでも、かかわるならむりだなんてあきらめて必死で手探りしっとたんや。友達に何かいわれると、すぐだめだとあきらめたり。でも S さんが古文の研究や書道の先生になりたいてっていったときの表情はとても前向きであかるくて、私なんでいろんな束縛にとらわれてたんやろうって、われにかえって自分のしたいものを改めてみつめなおすことができたんよ。S さんのゆめに束縛がないというのはわたしの推測なんだけど」

「たしかに私はあまり束縛がないなあ、私は夢イコール職業じゃないんかも。」

「それ、どういうこと？」

「私の夢は、感性ゆたかな人になることなん。わたしな、中学で古文を勉強して古文の世界にふれて、なんて感性のときすまされた世界なんだろうって感動したんよ。」

S さんはそして私に古文の世界についていろいろ教えてくれた。平安時代の貴族はゆっくりとしたなにもない日常のなかで、日々の季節のうつりかわりや草花のちいさな変化に敏感にきづき、手紙や歌にして、愛する人に伝えたり、日記にしたためたり、本当に感性のゆたかな世界だったのだそうだ。今ではあわただしい生活のなかで人々は、きづかないような自然の変化やうつくしさに、心をときめかせていることに感動したのだそうだ。確かに古文の平安貴族のあの優雅な世界には、ゆっくりと流れるような時間のなかで自然の美しさがきらきりと、輝いているような気がする。S さんは中学でその美しさに気づき、自分もそんな感性ゆたかな人になりたいとおもって、ずっと、それから書道や古文を勉強しているのだそうだ。

「でもそれにきづくひとみこそ感性豊かなんじゃないかな。」

わたしがそう言うと彼女は本当にうれしそうにした。

彼女をみると、職業をえらぶというよりも、わたしはこういう人になりたいっていう思いを通して、最終的にあらわれた職業が古文や書道の先生である。日本の伝統文化に対する深い感動をとおして、そこから自分の目標とする人間像をはっきりと認識している。感動すること。それは、人間にとって大切なことだと思う。ピアノを夢中でやっていたとき、よく目をつむって、家の中のピアノなのに、広々としたホールで引いているような想像をして、うっとりして弾いていた事を思い出した。そうすると音がポーンと遠くまで広がって響いていくような気がしていた。ピアノをとおして、自分もほかの人も感動させるようなピアニストになりたかった。あのころはよくいろいろなことに感動していたような気がする。ピアノを失ったこと。それは私にとって本当に悲しかったし、わたしの心も、感動することを忘れてしまったような気がする。

### (3) 過去

大学受験での挫折で夢とまっすぐ向かい合うことに臆病になった私。でもひとみがこのように夢にたいして、まっすぐで、恐れがないのは、もしかしてまだ挫折をかんじたこと

がないからなのかな？

「Sは夢にたどりつくことに失敗したり挫折をかんじたりしたことある？」

「わたしは挫折をかんじたことはないけど、自分がいやになったことがあるんだ。それは自分がどういう存在であるべきか、ってかんがえた時期があつて。」

私もそれはよく考えることである。自分の中で一番大事にしようと思うことって何なんだろう。私はだれのために、何のために生きているのだろうか。そういうスタンスを念頭において生きることって意味があるのだろうか。

「それは、自分の生き方のスタンスのこと？」

「私は小学校の時からつねに優等生だったんよ。まわりの人も親もみんな、ひとみちゃんはずごいね、って誉めてくれて口では、そんなことないって言いながら、心の中では人より、いい成績をとることとか、いい学校に行くことが自分にとって当たり前になっていたんだ。それはすごい、高慢というか、はづかしいことなんやけど。で、地元で一番の高校に進学して、そのころから、その優越が自分にはなくてはならないものになって。でも一方でそのことを保ちつづけることに疲れてる自分にきづいたんだよ。わたしって一生こういうふうに、人にどうおもわれるかとか、成績が落ちたり、失敗したらなんて弁解しようって思いながら生きていけないかんのかなって。」

彼女が正直にインタビューに答えてくれていることに、心の中で恥ずかしいと思っていることもすべて教えてくれていること、とてもうれしかった。本当に私に心を開いて話をしてくれている。

「高校時代それでもその成績をたもつことにつかれつづけて、私はなんなんだろうっておもったよ。いっぱい無理をして理想の自分をたもちつづけて常に人より上にたっていようとしてる、でも、これは本当の自分じゃない。本当の自分はなんなんやろうって。」

「本当の自分かあ。」

しばらく私は考えこんでしまった。

中学3年くらいからだろうか。ピアノコンクールでいい賞をもらえばもらうほど鼻が高くなってきて、しかし同時にその地位をたもつことが重荷になってきていた。練習しているとき、自分の音を聴くよりも「ああ、今度のコンクールで賞がとれんかったらどうしよう」という不安でいっぱいであった。知人や友人がなんて思うだろう。母親はなんていうだろう。そしてついには、人前で手が震えてうまくひけなくなってしまった。怖くて怖くて、人を感動させることからどんどんとおざかり私に順位もどんどん下がっていった。わたしが大学を受けたとき、もしかすると、音に「たのしむ」という喜びがひびいてなかったのかもしれない。受験前になり、大学には行ってやろうという必死の思いでいっぱいだった。きっとあの時の音は悲鳴のような音だったにちがいない。もし私が競争する気持ちを忘れて子供のころのように純真にピアノを弾けていたならば。

(4)自由

私は聞いた。「今はその悩みはないの？」

「それがね」

Sさんは明るい笑顔になって言った。

「わたしは早稲田の一文におちたんよ。そのとき、心の中で思った一言は、ああ終わった。やっと終わったって。本当に解放された。私は結局二文にうかったんやけどね、あんどき、うかつたらまだ傲慢にも優越感に依存しつづけとったと思うな。はじめて外から自分の能力を否定されたっていうか、でも、そのとき、私は、いろんな束縛から自由になれたっておもったんだよ。もう、だれかより優位にたちつづける必要はないって。」

私ははっとした。わたしの場合、大学におちたときかんじたのは否定されたという挫折感、どんなに時間をかけてもどんなに練習しても私は失敗した。ピアノにたいする能力の限界やらを感じてしまった。

なのに大学で落ちた時点で彼女は同時に「自由」を手にいれたというのだ。

「じゃあ、そのときに、ひとみは、ああ、これが挫折だ、って思ったりせんかったんやね。」

「うん、わたしは地元で親が私のことを自慢したりするのに心の中でつかれとったからね。東京にでられる。もう自由に自分のしたい勉強ができるっていう喜びでいっぱいやった。」

「親が自慢っていったよね。Sが成績優秀だと周りの人に自慢してたってこと？親は大学におちたときなんていった？」

「うん、ほんと、ふつうは他人に自分の子をほめたりしないよね。私はほんと、それがいややった、わたしの親は早稲田という大学の名だけでも満足してたんとちゃうかなって思うな。でもやっぱり一文の方がいいっていう先入観があったみたい。」

私にとっても親の期待は大きな束縛であった。それが肩に重くのしかかってきているのにもかかわらず、それを言い出すことができなかった。Sさんにとっても親の期待は苦痛であったという。

Sさんは言った。

「私が東京に出てきたんは親からにげるためやよ。もうこれ以上い親の前でいい子にしとれんかった。早く逃げたくて。」

「いい子」その言葉は私のいままでの生き方そのものをあらわしているような気がする。

厳しい母親の前では、いうとおりにはしかなかった。学校から帰っても、ピアノのことばかり言う母親にとっては、私のピアノだけが、自分の喜びであり、私は別に、かわいくないのではとと思っていた。ずっと私の中で母の愛はピアノにむけられているのではないのかとと思っていた。

中学にはいって母も離れていったが、ある日けんかをした時、「どうして小さいころ遊ばせてくれなかったん？」と怒っていったことがあった。母はとても悲しそうな顔をした。

「私はあんたたちがかわいくて仕方なかったんよ。」

私はそのことを、今でもとても反省している。母にとってどんなに、私のことがかわいかったか、最近やっときづいた。あんなに叱ったり、感情を一喜一憂させたのはそれがほかでもない私だったからなんだ。なにによりもの証拠は、ピアノがなくなっても母はあいかわらず私のことを人一倍心配してくれている。あのころ母の愛をかんじれなかったのは、私の視野がせますぎて、その大きな愛情を卑屈にうけとってしまったなだと思う。それにもっと早く気づくべきだった。

ただ、大事なことは、親の愛をうけとって、それに束縛されてはいけないということだ。本当の親孝行は、決して「いい子」であることではないと最近よく思う。自分が一人の大人としてなにをしたいのかを考えて自立して充実した人生をあゆまなければならないと思う。

Sさんは机の上の日記をみせてくれた。好きな人とのメールのやりとりや、平和活動サークルでしりあった写真家とのはなしなどがびっしりとかかかっていた。

「写真家の人とはなしたり、いろいろな人と話すようにこころがけとる。しかも、それを自分も言葉でかいていたら、ふりかえったときジーンとくるし、何年たっても、もどってこれる」

人とのつながりの中で生まれた感動をかきとめることで自分が成長できるように毎日日記をかいているのだ。

#### (5) 発見

親、他人、世間の評価ばかり気にしていたころ、わたしは、このように考えることができなかつた。音楽や夢に対する感動も色あせていた。そうか。私がこの夏まで、ずっともやもやしていたのは、「自分が」なにをしたいのかを、はっきりと答えることができなかつたからなんだ。他人と比べたりすることは、自分を苦しめるばかりでなく、ものごとをうまくいかせなくする。Sさんも同じように、周りの期待や、自分の優越をたもちつづけることで、自分を見失っていた。

なんだか、最初のSさんの魅力がなにかわかってきたような気がする。

それは「一人の大人として、自分がなになりたいたいのか。なにをしたいのかを、ちゃんとみつめて、歩んでいる姿、そして、心の感動を大切に育てている姿」である。人と比べること、をやめて、自分をみつめて、そして自分が日常の中で感じたことを豊かに実らせて、自分の栄養にしている。食べ物から人間の体ができているように、感じたことを心の栄養として豊かに育てている。それは決して他人にどう思われようとか、そういうことではなく、あくまで自分のなりたいたい姿だ。そして、その姿は「いい子」である自分の「なりたいたい姿」でもあったのである。「魅力的な人」とは、帰納的に定義してみると、自分が「そうなりたいたい」と思う人なのだろうか。確かに、その束縛がなんであるかに違いはあれ、自分を見失った状態から、自分をとりもどしている今の彼女の姿は私には、とても魅力的にうつったのだ。だから彼女の一言が私を、堅い束縛から自由にしてくれたのだ。そして、魅力というものは、それをただ感じるだけでなく、私自身にも、幾分か力を与えてくれた。

「そうになりたい、もっと知りたい、そしていつのまにか力を分け与えてくれる人」

これが私にとっての魅力の正体だろうか。このインタビューを实践する前においては、Sさんのおかげで、自分を見直して、あたらしい夢を見つけることができたという、ただ漠然とした感謝の気持ちや、なにか、自由さや、ほっとする安心感しか感じていなかった。なにが魅力？といわれて、うーんなんだろうとはっきりとした言葉がでてこなかった。しかし、私はこの授業において、改めて振り返ってみて、彼女の魅力に再び気づいた。もし、彼女の過去や苦しみをしらなかつたら、このような感動はできなかつたと思うし「ひとりの大人の自分」として、生きていくことの大切さにも気づくことはなかつた。

このようなことは、これからも実践していきたい。魅力をかんじた人にたいし、その魅力の真相をこっそりさぐって、自分と重ねてみて、日記に書いてみたらおもしろいかもしれない。

今私は毎日夜日本語学校にかよっている。そこで出会った人は「将来頑張って、絶対一緒に卒業しようね」と言って大学生の私をはげましてくれる。心からの励ましに勇気がわいた。人との心の底からのコミュニケーション。そしてそこから生まれる感動はまた自分のものとして花にしてさかせることが大事。

最近、心にゆとりができて、ピアノも弾きたくなってきた。毎週通っている教会の先生が、「うちにあるピアノ自由に弾いていいよ」といってくれた。

音楽は私にとって、仁美の古文の世界のように、大切なもの。せつかく、習ってきたんだから、一生弾き続けよう。わたしの大事なもの、好きなもの、大切に育てていかなきゃ。

#### (6)あとがき

言語について、わたしは専門学校で、いろいろな角度から勉強している。化学のように、分析、記録したりすることもできる。だけど、私は、この言語を、文化に関して考えてみるならば、空間的、時間的なひろがりをもって、地球の周りに層をなしているような気がするのだ。

旧約聖書のバベルの塔の話がある。ひとは、同じ言葉を使って全世界を支配しようとしてバベルの塔を天に届くまで造ろうとした。神様はそれを知って、人々の言葉をばらばらにした。すると、人々は塔をつくることができなくなって、ばらばらに散ってしまい、塔は未完成のままに終わった。

人が集団で同じことをなすとげるには、共通の言語をもたなければ難しい。じゃあ、なぜ、地球上のみんなが、同じ言葉じゃないのかな。同じ言葉だったら、みんな共通でひとつの文化をきずきあげられる。けどなんで、ちがうのだろう。このことについてわたしは一日いろいろ考えてみたが、次第に、こういう考えがまとまってきた。別々の文化が共存すること、別々の言葉が共存すること、別々の考えが共存することでそれらは互いのも

のを援助したり、交換したり、ときには、助言したりすることで、全体がうまく調和するのではないかと思う。

さて、私はこの授業で初めてこんなに国籍を超えて、議論をする機会を得た。しかし、わたしは、個人個人の、育ちや感性が、それぞれの色を出していて、むしろ、これは国籍に文化の違いをみるのではなく個人に文化の違いをみたような気がする。みなさんの魅力を感じる人を通して、みなさん自身の分析をして、議論を交わした。そして、わたしは、みんなで互いの意見や、考えをぶつけ合い、そして、理解した。こんなに短い期間に、このように、深く内面について、さぐりあったのは、初めての経験であった。そこには何もステレオタイプもなく国籍なんか忘れていた。そして、ロシア、中国、韓国、日本、みんな感じることや、心のそこにある、感情は同じであることに今気づいて感動した。こう考えると、言葉や習慣が違うのは国籍の違いを感じさせるが、内面に掘り下げて、魅力ある人に感じるものや喜びや悲しみをみると、そこでは同じ次元で議論がかわせるということに気づいた。もちろん、国民性は、一見、自分と違うなにかを感じさせるけど、人に対する、感謝や尊敬、あこがれとかは、本当みんなかわりません。やはり、みんな、自分の人生を強く、より清く、目標をもっていきようとしている。そう感じました。わたしにとって、この3カ月の授業は大学にはいって、もっとも精神的な、そして充実した授業でした。人間的に、このインタビューを通して、成長できたし、本当に感謝です。クラスメイトのみなさん、三代さん、細川先生、そして授業に関わって協力していただいたみなさん本当にありがとうございました。